

# 「我が人生思い残すことなし」(前編)

※ 前回までのあらすじ ― 戦時中神戸で暮らしていた昭男は、母と用事で街中に来ていて空襲に遭った。すさまじい光景を眼のあたりにしながら、命からがら家に逃げ帰る途中の彼の胸中は、アメリカに対する悔しさと憎悪だった。―

## 2. 弟妹

昭男には5人の弟妹がいた。母は、彼らが待つ家に必死に向って走っていた。電車を降りた長田から、家のある垂水まで山電（山陽電鉄）に沿って数キロ。「走る」というより息も上がり、もう歩くに近かった。やっとの思いで家にたどり着いた時、弟妹たちは何事もなかった様に、みかん箱を机代わりに勉強していた。

昭和20年に入り、戦況もますます悪化し、学校はほとんど、休校状態だった。彼らは、午前中各町内で開かれる軍事教練に参加し、昼食をとることもなく自習していた。



髪を振り乱し、顔も体も真っ黒になった母と兄をみて「どないしたん！その格好！！」真っ先に気付いて振り返った長女の高子が叫んだ。と一斉にその声に驚いた他の弟妹達も、母と兄の方に駆け寄ってきた。

「大丈夫？」みんな口々に声をかけた。「大丈夫や、お前達こそ何もなかったか？」母の落ち着いた声にいく

か安心した様子だった。「とにかく着替えて。今、お湯を沸かすね。」高子はやさしく促した。「兄さんも、さあ。」二人とも空襲後の黒い雨で全身びしょ濡れだった。なぜか空襲のあとには必ずと言っていい程雨が降り、それが燃えて舞い上がった煙や灰と混ざって真っ黒になるのだ。「午後に警戒警報の音と、遠くにB29の飛行音が聞こえたけど、相当ひどい空襲やったんや。」「でもちゃんと無事で良かったわ。」高子は本当に安堵した気持ちでいた。「でもこのままでは、ここもその内どうなるか分からんね。アメリカは、もう日本を全滅させるまで、焼夷弾を降らせよるで。」

母は子供らの先行きを案じた。「いよいよ広島の実家に頼んで、疎開させてもらう方がええな。」以前から考えていた事を子供らに言って聞かせた。「俺は行かへんからな！」それまで無言だった昭男が突然大声を出した。

「そんな田舎に引っ込んだら、アメリカの奴らをやっ付けられなくなる！」昭男は悔しさを失せるところか、憎しみとなって益々つものらせていた。

「俺は今度の誕生日か来て15才になったら軍隊に志願し、予科練に入って立派にお国のために

死ぬまで戦ってやるんや。」「絶対に、逃げたりするのはいやや！！」一気にまくし立てた。

母や弟妹たちは黙っていたが、昭男の気持ちは痛い程分った。それはみんなも同じ想いだったからだ。父が、赤紙（召集令状）を避けるかの様に失踪してからというもの、昭男は山本家の「家長」として、「お国」に忠誠の義務を果たすべく、気負っている姿が健気で痛々しかった。

(つづく)

